

【木曽森林管理署】

9月17日（水曜日）、小川入国有林（長野県木曽郡上松町）において伊勢神宮（三重県伊勢市）で2033年に執り行われる式年遷宮に向けた祭典の一つ「御船代祭」の「御船代祭御杣山伐木の儀」が営まれ、御船代に使われる木曽ヒノキ、内宮（皇大神宮）用の伐採が行われました。

御船代祭は、御神体を納める器である、「御樋代^{みひしろ}」をさらに納めるための器である「御船代」の御用材を伐採するお祭りです。

（関連記事 広報「中部の森林」2025年7月、第254号掲載）

地元の三ツ紐伐り保存会10名のほか、伊勢神宮営林部の5人が、斧だけで伐採する伝統技法「三ツ紐伐り」で約2時間かけ樹齢約300年、高さ35m、直径96cmの大木を伐り倒しました。大木が予定された位置にゆっくりと倒れる姿は素晴らしく、見守った関係者から大きな拍手が沸き起こりました。

なお、伝統的な林業技術を間近に見ることができる貴重な機会でもあることから、局架線集材研修の一環として研修生も現地で伐倒の様子を見学しました。



9月19日（金曜日）、加子母裏木曽国有林（岐阜県中津川市）においても木曽署と同様に「御船代祭」の「御船代祭御杣山伐木の儀」が営まれました。

こちらの御船代木は、外宮（豊受大神宮）用とされるもので、樹齢300年を超える、高さ30m、胸高直径120cmの大木でした。

当日は100名を超える関係者が見守る中、神職による祝詞奏上^{のりとそうじょう}に続き、裏木曽三ツ伐保存会と神宮司廳^{じんぐうしちやう}営林部の杣人により、おおよそ3時間をかけてこの大木が伐採されました。

伐採に携わった杣人からは「今後もこれだけ大きな木を伐ることはないだろうから、良い経験ができた」と感慨深い様子でした。

見守る関係者からも「このような立派な木を神宮へ納められることは地元として誇らしい」との感想を話しながら切り株に立てられた鳥総立^{とぶさたて}の写真を盛んに撮影していました。

当署管内での一連の祭事はこれにて終了となりますが、これを契機に益々国有林への理解を深めていただければと考えています。

